島根大学法文学部紀要　文学科編　第12号―Ⅰ（1989.12）

注解『七十一番職人歌合』稿（四）

下　房　俊　一

凡例

一、本稿には『七十一番職人歌合』の中、第十一番および第十二番の注解を収めた。

十一番　山人　浦人

【職人尽】

〔五番本　東北院職人歌合〕五番左　海人

月を見てさてもすくへき身なりせは秋はもしほのけふりたてしを

あふことはかたしく浪のうきまくらうらみぬ袖はぬるゝ物かは

月

左の哥、心詞共にいひしられて、哥なとはかくこそよまゝほしけれ。たれの人そと心の中おもひしられて、心にくゝこそ。右哥……、但、哥すかた、もしほの煙たちまさりて侍。

恋

左の謌、いかにしていてき侍けるそや。世のすゑにはありかたくこそ侍れ。……されは左勝にや。

〔十二番本　東北院職人歌合〕十二番右　泉布人

月を見てさてもすくへき身なりせは秋は藻しほのけふりたてしを

……右の月を見てとおかれたる五文字、聊とか也といへ共、大かたのすかた浦さひて、心のうちやさしく聞え侍

り。仍、今すこし月に心さし深きにつけて、右を勝とすへし。

もしほくむならひはさそといひなせとことのほかなるわかなみたかな

……右、なへての人のしわさにもあらす。上代にも見不及侍り。世のすゑには有かたくいてきたる哥にこそ。凡嶺松雨を含て、深夜の夢を破る。左哥よろしけれとも、物にたとふれは玉と瓦とのことし。依、右勝侍らん。

〔鶴岡放生会職人歌合〕十二番右　漁父

とる棹の歌のこゑまで浦さひて月のしほせにいつる舟人

ふかくとも人の心をつるはかりあはれいかなる江をかたつねむ

判云、月は……右哥、棹歌一曲釣魚翁と申詩の心はへなるへし。いつれもよろしくみえ侍かな。為持。恋の左は……右の哥は、窃娘堤乃遙を尋て釣処にまよふ、皆いひしりて侍。……さらは右の勝と申へし。

〔飛鳥井雅康　職人歌〕四番右　浦人

闇にこそいさりをしかのしほかまのぬるよすくなく月をみる哉

〔伝鳥丸光広作　職人歌合〕海士人　うづもりの名のみ古りつつ時雨にも昔語りの松の行平　月も見じ焚くや塩屋の煙だに目をしばしばと須磨の浦人〔吾吟我集〕寄網恋　慎めどもそなたに心引く網の目許に恋の顕れやせん／寄蜑恋　よく慎めあまの刈り干す海松布もや潮染む中は舌たるきもの〔訓蒙図彙〕漁父　いをとり　漁人　漁者　漁郎　漁子　並同／蜑人　あまびと　蜑同　又曰蜑民〔人倫訓蒙図彙〕杣人　山彦の声ならで音する物なし。岩漏る水に渇を凌ぐよすがならで、人家もなき所を住み家となし、見上ぐるもはかりなく、見下ろすも底深き数百丈、峯を分け、猿猴ならずして梢を伝ふ業、危うきを忘れ身を顧みざるも、世渡るほど苦しきはなかるべし。／塩焼　汐汲　汐水は女の業としてこれ汲む也。同じ海辺の者なれば、魚とる海人に準へ、汐汲む海人ともいへり。汐は海にて汲み、薪は山に求めてこれを焼くゆへ、薪とる老夫を塩木の翁ともいへり。誠に塩焼くありさま、見るに苦しき業なり。人家離れたる海辺にて焼きぬれば、朝夕に立ち昇る煙の、風に従ひてさまざまの風情をなすは、又較べ見んものなきゆへ、塩屋の煙とてこれを愛し、哥人もこれを愛でて和哥には詠ずるぞかし。／蜑人　海人の業、夫船をさせば女は水の底に入る。魚をとり目をとり其の外海草をもとるなり。海人のいさり火といふは、船にともす篝、たぐ縄といふは、腰につけて海に入る事あり。其の縄を動かせば引き上ぐる事あり。これをいへり。皆和哥にも是を詠ず。まことに苦しき業なり。／漁人　海の猟師なり。釣針を垂れ、網を下ろし、其の品一つならず。一切の鱗目に触るるを幸ひに取らずといふ事なし。〔職

人尽発句合〕三十八番右、杣人　日黒みや斧の柄汗に朽ちぬべし　杣人が高き梢に登りて面を日に焦がせるも、裳に汗を絞りながら大原女は一入ならむや。「大木を伐るもまた身のまへが大事也」　／　四十七番左、網引　夕霧や網子ととのふる声の闇　左右ともに殺生を事とするをあざみたるか。……されどかかる業もありてこそ、大床子の御物の八珠もまはるなれば、あながちに罪をも咎むべからず。善悪不二なり。是非を言はず。〔職人尽狂歌合〕いさりし　風になる雲かと花に七日まで鯛釣る海人の舟はほどかず　左、万葉集の浦島子の長歌に、鯛釣りほこり七日まで、とあるを思ひて、花の七日に用ひられしたくらみ、言ふべうもあらず。感深く侍り。……左を勝と定めて侍り。「一里二里のほどは潜き泳ぎも易く仕りてん。八百里九百里はいかでか」　／　いさりし　花の波潜りて海人は愛ぬらむ釣りの名によふ長縄手道　これも二つともおかし。勝劣分きがたきほどに侍れど、右（猟人）……勝つべくや。　／　猟師　浦に寄る桜鯛をばよそにして引き集めたき遠近の花　左右ともよろし。持にや侍らん。〔略画職人尽〕髪長き翁の顔や伊勢海老のひがごとに世を渡る釣り竿。

【本文】

十一番

秋さむきみ山のさとにたくほたの
なかき夜つきぬ月かけもかな
やみにこそいさりはせしかしほかまの
ぬるよすくなくつきをみるかな

左、ほたのなかくつきぬに月を思よせたる、優にきこゆ。右、いさり人はやみにねす、月にやすむといふを、これは松しまのあまにや。心あるさま也。持にてこそは侍らめ。

ひとりねのかすもしられぬあは畑の
うちわするへきときのまもなし
わすらるゝみきはにすつるたくなはの

み山―〔類〕深山　さと―〔類〕里
なかき―〔類〕永き　つきぬ―〔類〕尽ぬ　月かけ―〔類〕月影
かな―〔類〕哉
やみ―〔類〕闇　しほかま―〔類〕塩かま
つき―〔類〕月　かな―〔明〕哉

優―〔類〕いう　きこゆ―〔類〕聞ゆ　右―〔類〕ナシ　いさり人―〔類〕漁人
やすむ―〔類〕休む　これ―〔類〕是　松しま―〔忠〕おしま〔明〕
をしま〔類〕松嶋
心ある―〔類〕心有
ひとりね―〔類〕独ね　かす―〔類〕数
とき―〔類〕時
わすらるゝ―〔類〕忘らるゝ　みきは―〔類〕汀

くりかへしてもうらめしきかな
左、粟の数しらぬはかりを詮とよめる
にや。右、哥からよろしく
侍り。可勝。

◇　◇

山人
ことしは、穐
よりさむく
なりたるは。
浦人
この縄、はや
きるゝは。
たかうれ。

数―〔類〕かす

山人―〔忠〕十一番山人
穐―〔自〕〔忠〕〔類〕秋

この―〔自〕〔忠〕此

【語注】

◎山人は、山村生活者一般を指す言葉で、ここでは恋の歌に粟畑が詠み込まれている。当職人歌合では、九番に炭焼と小原女、十二番左に木樵が登場するが、右の「浦人」との対で、「山人」を配したのであろう。

浦人は、漁撈と塩焼きが歌に詠み込まれ、絵も漁具の手入れをしている所で、「海人」と同じと考えてよいが、『飛鳥井雅康　職人歌』で用いられた「浦人」という呼称を継承したものか。なおこれとは別に、当職人歌合では十五番に蛤売、魚売、三十八番左に塩売が登場する。

◎**秋さむきみ山のさとにたくほたの**　「ほた」は「榾」で、「ほだ」とも言う。炉や竈に焚く木の切れ端や枯れ枝。

「深山の里」だから、ことに秋寒く、夜通し榾を焚き続けるのである。その榾のように、「長き夜尽きぬ……」と続く。全体で序詞。「榾」は歌にまま詠まれるが、このような修辞法は異例。なお、『日本職人辞典』は、上句が「長き」にのみ係ると見て、この歌を、「一晩中焚けるような榾の長さ。同じように長い秋の夜。せめて月が明日の朝まで照り続けてくれれば、夜寒をかこつことも少しは慰められようものを」と解するが、榾そのものが長い、というのも不自然だし、下句も、月を愛でる気持ちの方に重点を置いて解すべきであろう。判詞にも、「榾の長く尽きぬに月を思ひ寄せたる」とある。

◎**ながき夜つきぬ月かげもがな**　長い夜の間中、ずっと美しい月を眺めていたいという気持ち。

◎**やみにこそ……**　『飛鳥井雅康　職人歌』は、第二句「いさりをしかの」。「しか」は、「いさりをす」の「し」に、筑紫の「志珂」を懸けるか。

◎**やみにこそいさりはせしか**　「いさり」は元来昼夜の別にかかわらず、海で漁をすることの意であるが、夜間「いさり火」をともしてする漁の意に限定されることもあったらしい（時代別国語大辞典　室町時代編「いさり」の項）。ここも、限定された意味と取った方がよかろう。「しか」は自己の動作・状態に関する願望を表す終助詞。ただしここでは、前に「こそ」があるから、闇夜にこそ漁はしたいものだが、月夜の頃は……、という気持ちで、第三句以下に続くと見るべきであろう。いさり火を灯して魚を集めるので、月の明るい夜は不漁なのである。『異体千句』に、「闇に焚く舟のいさり火月に消え／浦賑ははし海士の声々」の句がある。ただし、歌で、闇夜の漁といえば、「久方の中なる河の鵜飼ひ舟いかに契りて闇を待つらん〈定家〉」（新古今集、三、夏）、「鳥羽玉の闇のうつつの鵜飼ひ舟月の盛りや夢も見るべき」（壬二集）など、伝統的に鵜飼いが詠まれるのが普通であった。当職人歌合十五番右、魚売の月の歌「桂鮎取りて売るかと闇待たば月の値ひはなくなりぬべし」も、桂川の鵜飼い。

◎**しほがまのぬるよ**　「塩竈」は、海水を煮詰めて塩を作るための竈。「塩竈の濡る」から「寝る夜」と続く。ただし、歌枕の「塩竈」を含めて、「塩竈」を詠んだ歌は多いが、このような懸詞の使い方は例を見ない。

◎**ぬるよすくなくつきをみるかな**　夜寝ないで、毎晩のように月を見ている、というのである。ただし、「寝る夜

少なし」は、恋の歌によく使われる言葉。二番語注「ぬる夜なくてぞ」の項参照。

◎ほたのながくつきぬに月を思よせたる、優にきこゆ　榾の夜通し尽きないということから、夜もすがらの月を連想した点が「優」だという。「優」は歌論用語で、繊細優美で伝統的な情趣を言うが、ここも、判詞をもっともらしく見せるために使われたに過ぎない。上述のごとく、「榾」から「月」への連想は異例で、むしろ奇抜とも言える。

◎いさり人はやみにねず、月にやすむ　この「いさり人」も、夜、いさり火を灯して漁をする漁師と取るべきであろう。ただし、「いさり人」という用例は知らない。闇夜には漁に出るので寝ず、月夜に寝る。諺の類かと思われるが、未考。『兼載雑談』に、「花に帰り、月に寝たるなどは、情なきやうなれども、上手の一かどするは面白し」として、「闇を待ついさりの海士の月に寝て」の例句を挙げている。

◎松しまのあまにや、心あるさま也　「松」は、忠寄本は「松」の草体に似ているが「ホ」と読める字。明暦板本は「をしま」とする。松島は、陸奥国（現宮城県）松島湾一帯の景勝地、雄島（小島）はその中で最も有名な島で、ともに歌枕。いずれにしても十分意味は通じるが、「松しま」→「ホしま」→「をしま」と誤ったのであろう。「心あり」は風流を解する心があること。「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり〈素性〉」（後撰集、十五、雑）の歌を本歌として、「心ありて物語せん海人もがな舟漕ぎとめむ松が浦島」（拾玉集）、「心ある雄島の海人の袂かな月宿れとは濡れぬものから〈宮内卿〉」（新古今集、四、秋）、「心ある海人の藻塩木焚き捨てて月にぞ明かす松が浦島〈祝部成茂〉」（新勅撰集、十九、雑）などの歌が詠まれ、松島（雄島）の海人は「心ある海人」だとされるようになった。謡曲「松風」にも、「松島や小島の海士の月にだに影を汲むこそ心あれ」とある。これらのことを踏まえて（「塩竈」からの連想もあって）、「寝る夜少なく月を見る」というのは、松島の海人なのであろうか、と言った。なお、「心あり」は、歌論用語でもあり（十番語注「心あるにたり」の項参照）、十番の場合同様、この言葉は判詞をもっともらしく見せるためにも役立っているが、ここでも特定の歌論上の理念を詮索する必要はなかろう。

◎ひとりねのかずもしられぬ　相手がつれなくて、幾夜独り寝したことか知れない。

◎あは畑の　「あは畑」は「粟畑」。粟は山間の痩せ地でもよく育つ。実が微小なので、「数も知られぬ―粟」と続

けた。ただし、「粟」が数の多い譬えに用いられた例を知らない。和歌では、「粟」が詠まれること自体まずなく、数の多いことの譬えには、「波」「真砂」などがよく用いられる。ここは、「真砂」からの連想で「粟」を持ち出したか。ここも異例の物を持ち出して、面白さを狙ったのであろう。また、「粟」に、相手に「逢はず」の「逢は」を懸けるか。「粟畑を灯つ」から「うち忘るべき時の間もなし」と続く。

◎うちわするべきときのまもなし　粟畑を「打ち忘れる」ことがないように、相手のことを一瞬たりとも「うち忘れ」はしない。「時の間」の「時」は、粟の縁語（収穫時の意味の「時」）と見るべきか。

◎わすらるゝみぎはにすつるたくなはの　「忘らるる身」から「汀」と続く。忘れられた我が身のように、汀に捨てて忘れられた栲縄、その栲縄を「繰る」ように……。「栲縄」は海人の栲縄で、海人が海中に入る時の命綱。全体で、「繰り返しても」を導く序詞。「栲縄」から「繰り返す」と続く例は、「……いくたびか　海人の栲縄　繰り返し心に添はぬ　身を恨むらん〈源俊頼〉」（千載集、十八、雑）などがある。

◎うらめしきかな　「うらめしき」の「うら」は「浦」に通じ、「汀」「栲縄」などと縁語。

◎粟の数しらぬばかりを詮とよめるにや　数の多い譬えに「真砂」ならぬ「粟」を持ち出すという奇抜な思いつきだけに頼った歌だ、というのであろうか。

◎たかうれ　未考。

【絵】

山人は、筒袖袴姿に、鉢巻、襟巻をし、皮製らしい敷物の上に胡坐をかき、懐手をして、囲炉裏にあたっている。囲炉裏には榾が焚かれ、火箸も見える。ただし、白石本・忠寄本・明暦板本は、火箸を落とす。右後方に、柴、割り木の束と斧。ただし、白石本・忠寄本は、柴は描かない。

浦人は、筒袖を着、左膝を立て、右足を伸ばして、縄を手繰り寄せているところ。素足。横に曲げ物の桶二つ。左後方に網干し。白石本・忠寄本は全く別の絵で、舟の上で縄を手繰り寄せているところ。舟に櫂があり、遠景に網干

し。白石本系統の絵は、新しく描き変えたものであろう。八番〔絵〕の項参照。

【参考】

○　うらさびしくも春帰る頃
　藻塩焼くけぶりに霞む雁鳴きて　〈心敬〉　（新撰菟玖波集）

○　それと見せぬは心ありけり
　山賤の庵を花のかき籠めて　〈玄宣〉　（同）

○波の上海の限りも見え分かで
　藻塩火うすき月の夕暮　〈勝仁親王〉　（同）

○　夜寒悲しぶ葦の屋の内
　海人衣身をうら風にうちやまで　〈宗源〉　（同）

○　賤が屋に折り焚く柴もなを寒み
　冬の住まひぞ山は悲しき　〈近衛尚通〉　（同）

○　海人の袖師の浦風ぞ吹く
　藻に住まぬ我から身をやしほるらむ　〈多々良政弘〉　（同）

○　数々帰る海人の釣り舟
　いかが住む浪に小さき離れ島　〈宗長〉　（同）

○　釣り舟の数まさりゆく須磨の浦
　耳かしがまし海人の囀り　〈後土御門天皇〉　（同）

○　夜の間の風やのどかなるらむ
　いさり火の数あらはれて漕ぐ船に　〈兼良〉　（同）

○　見しも聞きしも末ぞはかなき
　あくる江のいさり火遠く鐘鳴りて　〈尊海〉　（同）

○　霞みつつ舟こそ見えね浪の上
　夕暮深き沖のいさり火　〈兼載〉　（同）

○　心ありてはいつあかしがた
　夜な夜なの釣りの火ともす波の上　〈心敬〉　（同）

○　せばき袂をくたす海人の子
　大海の遠き潮干に漁りして　〈智蘊〉　（同）

○　仮り寝ぞ月を頼む影なる
　浦人のいさり焚く屋に今夜来て　〈宗砌〉　（初瀬千句、一）

○　作りなすあまつ（たカ）の杣木墨を打て
　冬の構へに籠もる山人　〈超心〉　（同、四）

○　年は一夜に越ゆる天の戸
　浦人の心残りて舟浮けて　〈日晨〉　（文安雪千句、三）

○　片枝の紅葉映る松が根
　山人の分くる尾の上に萩散りて　〈心恵〉　（享徳千句、六）

○　泊り舟巻くや帆綱の長き夜に
　敷く菅薦の十府の浦人　（異体千句、四）

○　末霞む岩の崖道辿りかね
　入る山人や一人越ゆらむ　（同、十）

○総じてこの浦を阿漕が浦と申すは、伊勢大神宮御降臨よりこの方、御膳調進の網を引く所なり。されば神の御誓

ひによるにや、海辺のうろくづこの所に多く集まるによつて、浮世を渡るあたりの海士人、この所にすなどりを望むといへども、神前の恐れあるにより、堅く戒めてこれを許さぬ処に、阿漕といふ海士人、業に望む心の悲しさは、夜々忍びて網を引く。暫しは人も知らざりしに、度重なれば顕れて、阿漕を縛め、所をもかへず、この浦の沖に沈めけり。

（謡曲、阿漕）

○これは讃州志度の浦、寺近けれども心なき、あまのの里の海人にて候ふ。げにや名に負ふ伊勢をの海士は夕波の、内外の山の月を待ち、浜荻の風に秋を知る。又須磨の海士人は、塩木にも若木の桜を折り持ちて、春をわすれぬたよりもあるに、この浦にては慰みも、名のみあまのの原にして、花の咲く草もなし。何をみるめ刈らうよ。

（謡曲、海士）

○げにや面白き海士の磯屋とや、淡路潟あは沖舟の漕ぎ来るは、雨ごさめれ。今一返りも、汐汲めや人々。そよや陸奥の、そよや陸奥の千賀の塩釜は、名のみにて遠ければ、いかが運ばん伊勢島や、阿漕が浦の汐をば、度重ねても汲み難し、田子の浦の汐をば、いざ下り立たん。わくらはに問ふ人あらば侘ぶと答へて、この須磨の浦の汐汲まん、須磨の浦の汐汲まん。

（謡曲、絃上）

○これは須磨の浦に、旦暮に釣りを垂れ、焼かぬ間は塩木を運び、浮世を渡る者にて候ふなり。

（謡曲、須磨源氏）

○いかにこれなる老人、おことはこの山賤にてましますか。さん候ふ。この浦の海士にて候ふ。海士ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべけれ。そも海士人の汲む汐をば、焼かでそのまま置き候ふべきか。げにげにこれは理なり。藻塩焚くなる夕煙、絶間を遅しと塩木とる、道こそかはれ里離れの、人音稀に須磨の浦、近き後ろの山里に、柴といふものの候へば、柴といふものの候へば、塩木のために通ひ来る。余りにおろかなる、お僧の御諚かなやな。

（謡曲、忠度）

○風向ふ、雲の浮き波立つと見て、雲の浮き波立つと見て、釣りせで人や帰るらん。待て暫し春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の声ぞかし。波は音なき朝なぎに、釣り人多き小舟かな、釣り人多き小舟かな。

（謡曲、羽衣）

○いざいざ汐を汲まんとて、汀に満干の汐衣の、袖を結んで肩にかけ、汐汲むためとは思へども、よしそれとても、女車、寄せては帰るかたをなみ、寄せては帰るかたをなみ、葦辺の田鶴こそは立ち騒げ、四方の嵐も音添へて、夜寒何と過さん。更け行く月こそさやかなれ、汲むは影なれや、焼く塩煙心せよ。さのみなど海士人の、憂き秋のみを過さん。松島や小島の海士の月にだに、影を汲むこそ心あれ、影を汲むこそ心あれ。（謡曲、松風）

○面白や、月海上に浮かんでは波濤野火に似たり、漁翁夜西岸に傍うて宿す、暁湘水を汲んで楚竹を焼くも、今に知られて葦火の影、ほの見えそむるものすごさよ。月の出汐の沖つ波、霞の小舟こがれ来て、海士の呼び声里近し。一葉万里の舟の道、ただ一帆の風に任す。夕の空の雲の波、月の行くへに立ち消えて、霞に浮かむ松原の、影は緑にうつろひて、海岸そことも知らぬ火の、筑紫の海にや続くらん。ここは八島の浦伝ひ、海士の家居も数々に、釣りのいとまも波の上、釣りのいとまも波の上、霞み渡りて沖行くや、海士の小舟のほのぼのと、見えて残る夕暮、浦風までものどかなる、春や心を誘ふらん、春や心を誘ふらん。（謡曲、八島）

○山人ハ棒をかたげて出ル。但つとをゆい付ル。中飯也。―此所ノ山人ト云。今日はそと奥山へ参て、たき木をいたさうと存ルト云テ行。（天理本狂言、土産山伏）

○塩屋のけぶりけぶりよ。立つ姿まで塩がまし（閑吟集）

○塩汲ませ、綱引かせ、松の落葉かかせて、憂きみほがす崎や、波のよるひる（同）

○汀の浪のよるの塩、月影ながら汲まふよ、つれなく命永らへて、秋の木のみの落ちぶれてや、いつまで汲むべきぞあぢきなや。（同）

○色が黒くはやらしませ、もとよりも塩焼の子でそろ（同）

○なほ引く物を歌はんや、なほ引く物を歌はんや、浦には魚取る網を引けば、鳥取る鷹野に狗引く（同）

○沖の磯際のあの塩浜は、あれこそ海人の、海人の塩浜よ、塩焼きかいては浜を干された、均らせや浜の小砂を、寝うよりあの白浜を見さいや（田植草紙）

○吉野の山へきさらきが参りて、花折り持ちて帰る山人　（同）

○われらにおいては、魚釣りが身分ある人たちの息ぬきとされている。日本では、卑しいこと、下賤な連中の仕事であるとされている。（日本覚書、六）

十二番　木樵　草刈

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕十二番左　樵夫

月のみそ帰れは人を送りける山風たのむ谷の夕暮

恋ち山うきにもいたくこりぬれは峯の妻木はとしわすれつゝ

判云、月は左歌、若耶溪の風のみにもあらす、鳳凰池の月さへ思出られ侍へし。右哥……いつれもよろしくみえ侍かな。為持。恋の左は、義婦坂のさかしきにつかれて、樵路をわすれ、右の哥は……皆いひしりて侍。恋路山や名所ならすは、おさへ侍らん。さらは右の勝と申へし。

〔吾吟我集〕寄薪恋　明暮の燃ゆる思ひにくべてだにたきも尽くさぬ我がなげき哉　／　寄樵夫恋　思ひ者に気を尽くしてもこりはてぬ身は衰へて八瀬の山人　〔訓蒙図彙〕樵夫（せうふ）　きこり　樵子（せうし）　同　又樵童（せうどう）　〔人倫訓蒙図彙〕牛飼　草刈、牛馬の食物（はみ）なり。草刈童は笛を吹くといふ事ありて、三路（ママ）の草刈笛など言ひ伝へたり。樵は哥を歌ふ。樵哥牧笛とも詩に作れり。／　樵夫　大原、静原、高雄より柴を担ぎ出る。八瀬、市原、二ノ瀬、鞍馬などより黒木を馬に負ふせ出る。夫山へ行けば、女は市に出るなり。其の外山里より箸木、楊枝木をを（ママ）伐り出すなり。〔豊蔵坊信海狂歌集〕東山路西山路柴座の町を　やあ見さひあの又山路この山路頂き連れた柴の座の町　〔略画職人尽〕椎柴の上に一枝さしかざす花や桜の木こり艶しき　／　虫の音の鈴や轡も休みぬらん馬追ひながら戻る草刈

【本文】

十二番

かへるさのくれはつるまてこるしはの
をい〳〵いつるやまの葉の月
夕草にをくつゆなからかりこめて
月かけをさへつかねつるかな

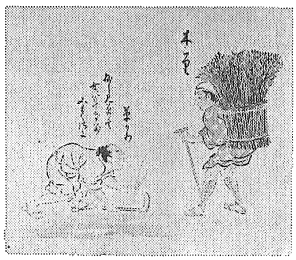
左右ともにおもしろく侍り。可為持。

やすむとておろす薪につみしりぬ
うしろにたにも人のよせねは
あさゆふに君をはかれす見まくさの
しかなかりそとひとなとかめそ

左は逸興あり。右は、かの岡の哥をよくとりなしたり。尤かつへくや。

◇　◇

木こり



草かり
ふし見草とて
世にもてなさるゝ
みまくさよ

かへるさ―〔類〕帰るさ　くれはつる―〔類〕暮はつる　しは―〔類〕柴
をい〳〵―〔忠〕〔明〕をひ〳〵―〔類〕おひ〳〵　いつる―〔類〕出る　やまの葉―〔忠〕〔明〕やまの端〔類〕山のは
つゆ―〔類〕露
月かけ―〔類〕月影　かな―〔類〕哉

うしろ―〔類〕後
あさゆふ―〔類〕朝夕　見まくさ―〔尊〕〔類〕みまくさ
ひと―〔類〕人
岡―〔類〕をか
かつへくや―〔尊〕勝へくや

木こり―〔白〕樵夫〔忠〕十二番樵夫

草かり―〔白〕〔忠〕蘓
ふし見草―〔尊〕〔類〕ふしみ草〔白〕〔忠〕伏見草

注解『七十一番職人歌合』稿（四）

【語注】

◎草刈は、恋の歌、画中の詞からすれば、秣を刈る者を指すようだが、牛馬の飼料の他、田畑の肥料として草を刈る場合も含めてよかろう。ただいずれにせよ、公家や武家では、牛飼（居飼）や馬丁などの下人に草刈りを兼ねさせたであろうし、農家などでは、農作業の一環として、草を刈ったと思われるので、草刈りだけを専門とする職能が、明確に分化していたかどうかは疑問。『人倫訓蒙図彙』には「牛飼　草刈、牛馬の食物（はみ）なり。草刈童は笛を吹くといふ事ありて、三路（ママ）の草刈笛など言ひ伝へたり。樵は哥を歌ふ。樵哥牧笛とも詩に作れり」と記すのみで、その他の類書でも『略画職人尽』が草刈を取り上げるのみ。職人歌合でも初出。こうした、実態としての「草刈」の曖昧さに反して、文学の世界では、当職人歌合の恋の歌にも引かれた「かの岡に草刈るをのこしかな刈りそありつつも君が来まさむ御秣にせん」は、謡曲『敦盛』『項羽』『錦木』にも引かれて著名。また、『和漢朗詠集』の句「山路日落、満耳者樵歌牧笛之声〈紀斉名〉」で有名な「牧笛」は、本来、牧童すなわち牛飼が牛への合図に吹く笛のことだが、「樵歌牧笛とて、草刈の笛、木樵の歌は歌人の詠にも作り置かれて」（謡曲「敦盛」）のように、「牧笛」＝「草刈笛」と解されるようになり、しばしば「木樵歌」と一対で、風流な物と考えられるようになった。かつ笛を吹く草刈のイメージは、謡曲『敦盛』や幸若『烏帽子折』などに見られる、貴人が恋ゆえに草刈男に身をやつして笛を吹くという、いわゆる「山路の草刈笛」譚を形成した。右の『人倫訓蒙図彙』は、これらのことを言う。こうした文学的な伝統を背景として、当職人歌合に「草刈」が取り上げられたものと思われる。

木樵と草刈とは、ともに山野における採集に携わる者で、両者が番いにされたことは常識的にも理解できるが、右のように「樵歌牧笛」すなわち「木樵歌、草刈笛」が、一対の風物と考えられたことも影響していよう。

◎かへるさのくれはつるまでこるしばの　一日中柴を刈って、暮れ果てて家路につくのである。柴を「負ひ負ひ」から下句の「追ひ追ひ出る」を導く序詞。ただし、実景描写を兼ねていると見るべきであろう。「くれ」、「はつる」は、「縛」「削（はつ）る」に通じ、木樵の縁語と見るべきか。

◎をい〳〵いづるやまの葉の月　月が徐々に出て来ることを言うのであろうが、月の出を「追ひ追ひ」と描写する

のは異例。「追ひ追ひ」という言葉自体、歌では余り用いられない。

◎夕草にをくつゆながらかりこめて　「夕草」という語は余り用例がないが、ここでは夕方に刈り取る草、または単に夕方の草と解してよかろう。「刈りこめて」は、四段活用の「刈りこむ」と同じく、単に、刈り入れる、の意とも解しうるが、露を一緒に「籠め」て刈る、というニュアンスで用いられたのではなかろうか。用例は稀だが、「刈りこむる露の行くへを訪ね来てあやめに契る軒の月影」（為尹千首、夏）や、謡曲「項羽」の「露刈りこめて秋草の、露刈りこめて秋草の、葉毎に影宿る、月をや船に乗せつらん」がある。

◎月かげをさへつかねつるかな　露もろとも草を刈り取ったので、露に宿る月影も一緒に束ねることになった、と喜んでいるのである。『日本職人辞典』に、「せっかく映っていた月の光もいっしょに束ねてしまった」と解するのはいかが。なお同想の歌に、「露ながらこぼさで折らむ月影に小萩が枝の松虫の声〈西行〉」（未木和歌抄、十四、秋）などがある。前項所引の謡曲「項羽」の句も同想。

◎やすむとておろす薪　「休むとて下ろす薪」は、『古今集』仮名序の「薪負へる山人の花の蔭に休めるがごとし」を意識した表現であろう。これを謡曲「志賀」は、「不思議やな、これなる山賤を見れば、重かるべき薪に、なほ花の枝を折り添へ、休む所も花の蔭なり。これは心ありて休むか。唯薪の重さに休み候ふか。仰せ畏つて承り候ひぬ。まづ薪に花を折ることは、道のべのたよりの桜折り添へて薪や重き春の山人と、歌人も御不審ありし上、今更何とか答へ申さん。又奥深き山路なれば、松も檜原も多けれども、とりわき花の蔭に休むを、ただ薪の重さに休むかとの、仰せは面目なきよなう」と脚色する。「見渡せば爪木の道の松蔭に柴寄せかけて休む山人〈宗尊親王〉」（風雅集、十六、雑）も、柴を刈って帰る途中の木樵。

◎つみしりぬ　「つみ知る」は、「つみ知らば報ひを思へ花筐目並ぶ人は一人ならじを〈慈円〉」（千五百番歌合、千二百四十八番左）や、「つみ知れる人に問はばや住吉やいくぞの世々の恋忘れ草」（松下抄）の例（ともに「罪知る」と懸詞）があるが、多くは「つみ知らす」の形で用いられた。すなわち、「契久恋　思ふとはつみ知らせてきひひな草童遊びの手戯れより〈仲正〉」（為忠家初度百首）、「古今一句をこめて、恋歌詠み侍りしに　いかにしてつみ知らす

べき春霞立ちぬる野辺の若菜ならでは」（壬二集）、「逢ふことをいつとか待たむ若狭路の山のくろつみつみ知らせても〈為家〉」（新撰六帖、二）等々で、恋の歌の例が多い。当職人歌合にも、「我が恋は心一つにしのぶ綿つみ知らすべき便りなければ」（五十九番右、綿売の恋の歌）、「思ふ人あはれ茶好きになりたらばつみ知らすべき時もあらまし」（六十九番左、華厳宗の恋の歌）の例がある。これらの「つみ知る」「つみ知らす」の「つむ」は、「身を抓む」ないし「身に抓む」こと、すなわち、身をもって体験することを言うのではなかろうか。「身を抓む」「身に抓む」という語は、「久しう罷り通はずなりにければ、十月ばかりに雪の少し降りたる朝に言ひ侍りける　身をつめばあはれとぞ思ふ初雪の降りぬることもたれに言はまし〈右近〉」（後撰集、十四、恋）、「春の野に生ふるなきなのわびしきは身をつみてだに人の知らぬよ〈読人不知〉」（拾遺集、十二、恋）、「梅壺の女御、心ならずえ参り侍らざりけるに、七日遣はさせ給ひける　ゆるぎのみかどの御歌　七夕の逢はぬ嘆きを身につみて今日の契りを我にかさなん」（風葉和歌集、四、秋）など、歌に比較的よく用いられる。この推定が当たっているとすれば、「つみ知る」「つみ知らす」とは、現代語で言う、我が「身につまされる」とか、相手に「思い知らせる」という語感に近いかと思われる。ここは、これまでは恋ということは他人事のように思っていたが、重い薪を背負っている今始めて、その辛さを思い知った、という意味になろうか。その際も勿論、「つみ」は薪を「積む」（ないし「集む」）の「つみ」に通じ、「薪」の縁語として用いられていると見るべきであろう。恐らく「恋の重荷」という言葉の連想もあったかと思われる。なお、『中世職人語彙の研究』は、綿売、華厳宗の歌の「つみしらす」は「抓み知らす」、すなわち、相手を抓って自分の恋心を知らせる仕種だと解する。『日本職人辞典』は、この歌については「罪と積み」とのみ注する。

◎うしろにだにも人のよせねば　重い薪を背負っているので、前の人に追い付くことができない。そのように、相手が自分を後ろに寄せ付けることさえもしてくれないので……。六十三番左、競馬組の恋の歌「追ひ馬の後れ果てたる我なれや取り付きがたき恋もするかな」も、似た発想。なお、『中世職人語彙の研究』は、「休むとて背中からおろす薪で、自分が思われていないことを知った、後に人がよってきて、手助けをしてくれないので」と、「寄す」を自動詞に解するが、自動詞の「寄す」は、人間が主語の場合は、軍勢などが寄せる場合に限定されていたのではなかろ

うか。

◎あさゆふに……　『拾遺集』の施頭歌「かの岡に草刈るをのこしかな刈りそありつつも君が来まさむ御秣にせん〈柿本人まろ〉」（九、雑、もと『万葉集』にあり）の本歌取り。

◎あさゆふに君をばかれず見まくさの　「君をば離れず見まく（ほし）―御秣の」と続く。朝な夕なに君を、離れずに見ていたい、すなわち、一日も欠かすことなく相手の男に通って来てほしい、というのである。「離れず」は「枯れず」に通じ、「秣」の縁語。

◎しかなかりそとひとなとがめそ　そんなにすっかり刈ってしまうなと、誰も咎めないで下さい。本歌では、男を待つ女が草刈に向かって「しかな刈りそ」、すなわち、自分の男のためにも少しは残して置いてくれ、と嘆願したのであるが、ここでは、女自身が男のために秣を刈っている場面に転じ、毎夜通って来てほしいので、ついつい多く刈ってしまうが、そのことを咎めないでくれ、というのである。男が馬で通って来るという設定。本歌と全く異なった趣を詠んだ点に、この歌の滑稽味がある。

◎ふし見草　「伏見」は山城の伏見か。「世に持てなさるる御秣よ」と言っているから、良質の秣なのであろうが、未考。『角川日本地名大辞典　京都府』の「深草山」の項に、『紀伊郡誌』を引いて、「地元の住民は当山を御草山と呼んでいたという。御草山の由来は、江戸期、将軍が上洛の折、当山から馬の飼料用の草を調達したとの口碑によるという」とあるが、この御草山と関係あるかどうか。

【絵】

木樵は、頭巾を被り、裾の短い筒袖を着、脚絆・草鞋履きで、柴を背負い、杖を衝いている。白石本・忠寄本では、杖の先が木樵の後方にあって、動きがよりよく据えられている。

草刈は、同様の筒袖を着、草鞋履きで、鎌を手にして、草を刈っているところ。周辺に草。

東博本では、木樵と草刈の立つ地面が一続きに描かれており、両者は明らかに、一つの絵となっている。

【参考】

○　馬草に刈るや茅の葉なるらむ　〈宗範〉
　行き帰り栗栖の小野の露分けて　（新撰菟玖波集）
○　木を切る音の信楽の里　〈智蘊〉
　網代打つ田上川の末の秋　（同）
○　薪こる人や尾上に入りつらん　〈源経行〉
　舟さし捨つる雪の朝川　（同）
○　人は静かに冬籠もる里　〈多々良政弘〉
　薪こる斧の響きに峯冴えて　（同）
○　薪こる男の通ふ山蔭　〈宗伊〉
　朝夕に送るや風の渡し舟　（同）
○　野は若草に鋤きもやられず　〈藤原長泰〉
　駒に飼ふ美豆の御牧の雪解けて　（同）
○　山より来つつ猶ぞ苦しむ　〈妙椿〉
　柴人は厭はん仮の世を知らで　（同）
○　草茂る道のちまたは見え分かで　〈道明〉
　暮れて木樵の哥歌ふ声　（紫野千句、三）
○　老いたる牛の足の遅さよ　〈成阿〉
　草刈の行くは後ろの山暮れて　（同、五）
○　父母はいさねるは誰が子ぞ　〈救済〉
　むら牛の帰る草刈もろともに　（同、七）

○　此の里は野山二つの道なれや
　木樵草刈業の苦しさ　〈日晟〉　（初瀬千句、四）
○　笛の音も聞こゆる林杏けきに
　帰れば暮れぬ野路の草刈　〈泰藤〉　（同、五）
○　里の上なる四方の山の辺
　雪間をも待たぬ樵夫の踏み分けて　〈良珍〉　（文安月千句、二）
○　霧渡る片山松の末見えて
　峰の木樵ぞ道たどり行く　〈満綱〉　（顕証院会千句、六）
○　山陰に独り小田守る夕まぐれ
　帰る末野の草刈の声　〈来阿〉　（同、七）
○　駒乗りとめて払ふ野の露
　草刈の袖とは見えず花薄　〈忍誓〉　（宝徳四年千句、一）
○　哥の道にぞ心すむなる
　奥山は谷の木樵を友として　〈宗砌〉　（同、四）
○　雲にいる鳥は谷にや帰るらん
　木樵は出づる道の山々　〈超心〉　（同、七）
○　踏み分けて山口しるし木樵人
　杣の仮屋に煙立つ見ゆ　〈専順〉　（享徳千句、三）
○　歌ふ夜の暁深く声深けて
　木樵の急ぐ道や苦しき　〈専順〉　（美濃千句、二）
○　朝影遠く岩根踏む道

注解『七十一番職人歌合』稿（四）

暮るる日に帰る木樵の伴ひて　〈圭祐〉　（因幡千句、三）

○　重なる峰に続く懸け橋
　里遠く木樵の帰さ暮るる日に　〈永喜〉　（同、十）

○　おろかなれども歌や慰む
　行き帰る山の木樵の声す也　〈宗祇〉　（表佐千句、二）

○　掬ぶやいつの飛鳥井の水
　夏深き道の御馬草刈り残し　〈宗祇〉　（同、六）

○　入りがたし望みありとも歌の道
　雪なを深み木こる山賤　〈長敏〉　（河越千句、一）

○　遠き野に痩せたる村の薄煙
　木こる翁のたどる山道　〈宗祇〉　（同、六）

○　暮れぬればむらむら帰る空の雲
　峰の木樵の下る里々　〈道真〉　（同、七）

○　思へただ哥ぞ心を慰めむ
　木樵を友と住める山蔭　（三嶋千句、六）

○　霧暗き野は行く人も見ず
　馬草刈る舟の音して暮るる江に　（同、六）

○　冬されば奥も山こそあはらなれ
　木をこる谷に煙立つ見ゆ　（同、十）

○　急ぐとも我を伴へ旅の空
　木をこる人の帰る山道　〈宗悦〉　（葉守千句、二）

○　行き悩む駒の沓屋の休らひて
　草刈るあとを残す芝山　　（名所千句、五）

○　海人は小さき舟頼む也
　いづくにかこるや薪も積みをかん　〈印孝〉　（永原千句、九）

○　残るべきその一節は思ふなよ
　木樵の帰る山は暮れけり　〈道泉〉　（池田千句、四）

○　思ふままにはいはれざりけり
　山人の薪に花を折り添へて　（犬つくば集）

○めづらしき上様へあげ申すべきために、薪に花を折り添へて、罷り帰るなり。あら、くたびれ。　（鼠の草子）

○草刈笛の声添へて、草刈笛の声添へて、吹くこそ野風なりけれ。かの岡に草刈る男野を分けて、帰るさになる夕まぐれ、家路もさぞな須磨の海、少しが程の通ひ路に、山に入り浦に出づる、憂き身の業こそもの憂けれ。　（謡曲、敦盛）

○その上樵歌牧笛とて、草刈の笛木樵の歌は、歌人の詠にも作り置かれて、世に聞えたる笛竹の、不審ななさせ給ひそとよ。げにげにこれは理なり。さてさて樵歌牧笛とは、草刈の笛木こりの歌の、憂き世を渡る一節を、謡ふも舞ふも、吹くも遊ぶも身の業の、好ける心に寄り竹の、好ける心に寄り竹の、小枝蟬折様々に、笛の名は多けれども、草刈の吹く笛ならば、これも名は青葉の笛と思し召せ。住吉の汀ならば、高麗笛にやあるべき。これは須磨の塩木の、海人の焼き残しと思しめせ、海人の焼き残しと思しめせ。　（謡曲、敦盛）

○これは烏江の野辺の草刈にて候ふ。今日も草を刈り、唯今家路に帰り候ふ。野辺は錦の小萩原、刈萱まじる烏江野に、草刈るをのこ心なく、草刈るをのこ心なく、花を刈るとや思ひ草、家づとなれば色々の、草花の数を刈り持ちて、帰れば跡は秋暮れて、枯野にすだく虫の音も、花を惜しむか心あれ、花を惜しむか心あれ。　（謡曲、項羽）

○狭布の細道分け暮らして、錦塚はいづくぞ。かの岡に草刈るをのこ心して、人の通ひ路明らかに、教へよや道芝

の、露をば誰に問はまし。　（謡曲、錦木）

○山人出て、大雪に木を伐る所へ、西行来て、木を背負う。男、腹立てて落とす。西行、我が木と言ふ。検断出て聞く。我がよきに人のわる木があらばこそ人のわるきは我がわる木なり、此の歌にて負んで逃ぐる。男、追っ掛けて、切り落とす。留め。逃ぐる。　（天正本狂言、木こり歌）

○千人の舎人ども、此の由を聞くよりも、山路殿が吹く物の、名をば何といふやらん、横笛と申さうあふ、面白ひぞや山路殿、草ばし刈るな笛を吹け、汝が牛には草を刈りてかけふぞよ、吹けよ吹けよと言ふ程に、一度も草を刈り給はず。これをもちてこそ、夜更けて心澄めるをば、山路の草刈夜の笛、若布刈るは田子の浦、若草刈るは武蔵野よ、若布若草和歌の浦、用明天皇の、恋ゆへ遊ばす笛をこそ、草刈笛と申すなり。　（幸若、烏帽子折）

○わ郎らが殿御は京に小草刈る殿、石菖駒草や信濃萱を刈る殿、我が殿御は小草の奉行にさされた、草刈がのふては山を迷ふろう。　（田植草紙）